日本中世・近世移行期における村落の研究

関連するSDGsの国際目標



人間文化学部　地域文化学科　講師　高木　純一
研究分野　：日本中世史、村落史

概要：江戸時代の社会にイメージされるような、日本の「ムラ社会」＝「伝統」社会の成立の出発点として、中世後期の「惣村」の形成が指摘されています。私はこれまで、とくに山城国上久世荘という荘園村落を事例として取り上げ、その実態解明を進めてきました。このことは私たちの現代社会のルーツを知るうえで重要な意味を持ちます。

■中世「村請」状況

近世には村による連帯責任制の年貢納入体制である「村請」制が成立しますが、じつはすでに中世の荘園制下において、その原型をなす「村請」的な状況が形成されていたことを明らかにしました。

■「荘家の一揆」

上久世荘の百姓たちは、毎年のように、年貢額や農業に必要な経費の負担をめぐって、領主である東寺と交渉を行っていました（「荘家の一揆」）。現代で言う「春闘」のような労使交渉に近いものです。こうした運動を通じて、荘園に替わって、「村」という存在が、社会的・政治的な単位として認められていくことになるのであり、荘園制から村町制へという社会体制の変革の前提となります。



上久世荘のメインストリート。正面が鎮守蔵王堂

■「鎮守の森」の研究

上久世荘の領域内には草刈場や里山がなかったため、彼らは国境を越え、丹波国まで出向いて山林資源を採取していました。彼らがわざわざ10km以上もの距離を往復しなければならなかったのは、当時の京都近郊地域の山林資源がすでに枯渇していたことを示しています。こうした厳しい資源状況を補うために、当荘の百姓たちは、村の鎮守を囲繞する森林＝「鎮守の森」において、資源採取を行ってたことを明らかにしました。このような「鎮守の森」のあり方は近世にも確認され、宗教的聖地として人の立ち入りや伐採を禁じる近代以降の「鎮守の森」とは大きく異なるものです。



蔵王堂の「鎮守の森」の現況